

〔醍醐寺雜事記七〕一大僧正御房 定了 法務御主饗膳事○中

客料饗順覺沙汰

下部饗法式

飯長一尺七寸 口一尺二寸 温飯可盛七升

〔藻鹽草十九〕飯食物

すいはん水つけの飯也、夏のくいもの也、源氏たやすのみもとすいはんはやくなれにけりみづからけこのそなへをぞする

〔澠水燕談錄〕士大夫筵饌率以餽餽或在水飯之前予近預河中府蒲左丞會初坐即食餽餽予驚問之蒲笑曰世謂餽餽爲頭食宜在群品之先

〔倭訓栞中編十一〕すいはん 水飯なり源氏榮花などに見ゆ今の世にもありてひめといふ物なりといへり本草に殮飯を水飯なりといへり

〔飢苑日涉八〕水飯

水飯古謂之殮音孫、玉篇曰水蘇飯也、康照字典曰按說文餐或从水作飧、後人譌省作殮、又餐與殮別、殮从夕俗譌爲殮、孫奕示兒編字音之譌有以餐爲殮者謂其讀餐爲孫也 此方

人飯後必進湯謂之飯湯亦殮之遺意耳禮記玉藻曰君未覆手不敢殮又雜記曰少施氏食我以禮吾

殮而作註曰禮食竟更作三殮以助飽謂以飲澆飯也釋名曰殮散也投水于中解散也李時珍曰殮即

水飯也東京夢華錄曰州橋夜市當街水飯爇肉乾脯岳陽風土記曰湖湘間賓客燕集供魚清羹則衆

皆退如中州之水飯也益軒先生以爲今澆茶飯之類張耒詩我茶非世間天上蒼月 然澆茶飯即今古

奇觀所謂茶淘冷飯而非殮矣作殮法詳見濟民要術

〔本朝世紀〕天慶五年六月廿一日癸酉今日依主上御祈有被奉東遊并走馬左右十列、於祇園寺感神

院以右近權少將良岑朝臣義方爲勅使○中但進發之時內藏寮設饗又於感神院者穀倉院設水飯

〔源氏物語二十六〕いとあつき日ひんがしのつりどのにいで給てすゝみ給○中例の大殿のきん

水飯